

# この本の使い方

## この本のねらい

この本は鳥類学の入門書ではあるが、鳥たちの世界のほんの一部を切り取ったにすぎず、入門書としては不完全だ。また、はじめから通して読むようには作られていない。気軽にパラパラとめくれば、あちらとこちらのトピックが頭の中でパチンとつながったり、何かしらの発見があったりするような作りになっている。

ここで紹介するのは、アメリカ本土とカナダでごく普通に見られる鳥だが、書かれていることの多くは、世界中どこにいる鳥にもあてはまる。

## この本の構成

この本の中心は「鳥たちのポートフォリオ」の章だ。この章では、左側のページに87枚、96種の一般的な鳥をおおよそ実寸大で描画している（取り上げた種についての詳細は「この本で紹介した鳥たち」の章を参照）。右ページには同類の鳥に関するさまざまな興味深い話と、同種またはその近縁種の小さなイラストや説明図などを添えた。

登場する種の順番は、基本的に現在の分類に沿って並べている。すなわち、ガン類ではじまりムクドリモドキで終わるが、例外的に、水鳥はすべて陸鳥の前にしてある。

コラムの構成はランダムだが、鳥の視覚についてなど、話題が多岐にわたるものは、複数のコラムに点在している。関連のあるコラムは、相互に参照ページを載せている。どのコラムも最終的には関連しているが、相互に参

照ページを記載したのは、特に関連性が高いコラムだけだ。また、それぞれのコラムの内容は、ページ内で取り上げた種以外の鳥にもあてはまるものが多い（例えば、すべての鳥は共通した呼吸器系をもつことなど）。

概論では、各項目に関係があるコラムの場所がわかるようになっており、注釈付きの索引のように使うこともできる。また、各コラムをカテゴリー別に論理的な順序でグループ分けし、ページ番号を記している。概論を読めば、例えば、鳥の視覚に関するコラムのすべてを見つけることができる。

「この本で紹介した鳥たち」の章では、「鳥たちのポートフォリオ」でおおよそ実物大で描かれた鳥について、もう少し詳しく紹介している。各種の生態や近縁の種について述べ、多くの種ではイラストで描かれた行動に関連した話を紹介している。

また、コラムの多くは特定の研究論文を参考に行っている。参考文献の一覧は巻末をご覧ください。

## ご注意

本書で取り上げたトピックは、私が過去数年にわたって鳥を調査するうちに、興味をかき立てられたものだ。そのため、内容には非常に偏りがあり、鳥類学の総括としては不完全である。取り上げたトピックの多くは、近年の発見や、可能性が期待されている話で、専門家によって目下熱心に研究が行われている。本書の内容について、確実でない内容はそのように記し、隅々まで正確性を検証するように努めたが、このような要約を書くには簡潔にせざるを得ず、多少のニュアンスの違いが生じる可能性はある。これにより、意図しない誤りや、誤解を招く記述があるかもしれないが、それらは私の責任である。本書が鳥の世界をのぞききっかけとなることを願うし、より詳細は巻末の参考文献を参照していただきたい。

